アシの裏 クツの裏—足と靴からまちについて考える—

2015年9月6日（日） 川口市立アートギャラリー・アトリア

川口市に工房をかまえている靴職人の**五寶賢太郎**さんと、ワークショップコーディネータの**たむらひろし**さんを講師に、足と靴の関係から見えてくるまちについて考えるトークイベントを実施しました。

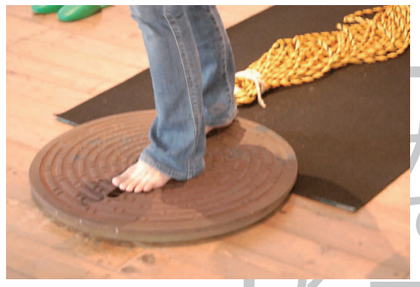
ふだん歩いているまちをはだしで歩けと言われたら、抵抗なく歩くことができるでしょうか。私たちが無意識に踏み進む地面には凹凸や段差のほか、ガラスや鉄など危険な物があふれています。講師の対談を聞く前に参加者は、たむらさんのナビゲートのもと、はだしで歩く感覚を味わうミニワークショップを体験しました。靴をはいていたときには感じなかったマンホールの冷たさや粘土のしっとりとした感触を意識し、足を守りながらも感覚を遮断する靴の存在への関心を深めれば、講師お二人の対談にも興味がわいてきます。

対談では、足と靴の関係から見えてくるまちについて話がはずむお二人。道が整備されるにつれて、ハイヒールをはじめとする多様な靴が流行し、靴の変化により足裏の感覚も変わってきたという歴史的背景を踏まえた話題は足と靴にたずさわってきたお二人ならでは。時代や環境にともなって変化をとげた靴や身体が、まちや文化の発展と深いつながりがあることを学びました。

注文主それぞれの要望に合わせたオーダーシューズとシューズリペアを専門としている五寶さんが靴選びのコツについて話すと、熱心にメモをとる参加者の姿もみられました。靴を選ぶ際に靴と足の間に指一本分の隙間があると良いという噂を耳にしますが、実はその選び方はあまり良くないとのこと。自分の足にぴったりフィットした靴を選び、成長に合わせて替えていくことが大事。自分に合った靴をオーダーメイドで作ることもひとつの手ではありますが、まずは市販されている靴の中からじっくり探してほしいとも話されました。多様性を増してきた靴ですが、その背景にはまちと私たちの生活の変化が深くかかわってきたことを教えていただきました。普段は意識しない感覚を研ぎ澄ませながら、身体と靴、まちについての知識を深める機会となりました。

山口紗友美（川口市立アートギャラリー・アトリア）

靴職人の五寶賢太郎さん（左）とワークショップコーディネータのたむらひろしさん



「学校になぜ美術があるのでしょう」+ 実践ワークショップ「チャブクロコレクション2015夏」

2015年8月28日（金） 入間市博物館アリット

小・中・高校の図工や美術の授業時間が少なくなっています。端的にいえば、教育上の必要度が低くなっています。一方で、わずかの時間でも図工や美術の時間が確保されているということに対して、「学校になぜ美術が……」という問いに対峙することになります。

第一部では、日本の美術界にフォービズムを導入した先駆者である萬鉄五郎の絵画「裸体美人」を主に取り上げて、対話形式で**三澤一実**さんの講演がおこなわれました。参加者は高校生や大学院生、美術教育関係者、一般成人など18人。「うまい／下手」「好き／きらい」がはっきりとわかれるこの作品について、参加者がそれぞれの感性で語り合い、さらに講師からは制作された時代背景や作者の意図、表現などが説かれ、おおいに場は盛り上がり、そして深化していきました。

つまり、教育をとおして美術を学習することは、人それぞれの感性をみがき、あるいは豊かにするために大切であり、また人それぞれの感性に違いがあることを認め合い、そこから多種多様な考えをもつ人間で構成する社会を健全に営んでいくことにもつうじるのだと納得した次第です。

工藤宏（入間市博物館アリット）

第二部は東野高等学校美術室に移動しての、実践ワークショップ「チャブクロコレクション2015夏！」。午前の講座参加者に一般公募による家族連れなどが加わり、5歳から70代までの32名が製茶を入れる大きな袋「大海」で衣装を製作し、ファッションショーを実施しました。

年代縦割りの3グループでそれぞれリーダーを選び、テーマ曲を決め、各自の衣装を作成しました。小学校1年生がみずからリーダーに名乗りを上げ、高校生や大人に指示を出すというほほえましい光景も見られました。

例年のSMFワークショップでは、小学生の補佐役に回っている高校生たちにとって、ファッションショーなどもっとも苦手なのではと思われましたが、楽しそうにショーに参加していたのは驚きでした。ワークショップの一参加者になることで、今後の指導に多くのヒントを得たという中学校教員の感想がありました。

山尾聖子（SMF運営委員）

創造ラボ アリットで何が起こるか?!

2015年9月27日（日）／展示 9月26日（土）～10月4日（日） 入間市博物館アリット

「アリット秋のお茶まつり」にあわせて、「創造ラボ」は「アリットで何が起こるか ?!」をキーワードに入間市博物館アリット館内でにぎやかに実施されました。**野田双子織研究会**のみなさんが製作した手織りの伝統的な縞織物に**杉野服飾大学**の学生さんがいどみ、制作したバッグの数かずで彩られた方丈庵。その前面の中庭は、**入間市華道連盟**の方がたの手によって流れる布地のようにダイナミックに配された竹やカラフルな花ばなでアクセントをあたえられ、生き生きと躍動する立体的な空間へと生まれかわりました。

中庭の生け花作品を背景にくりひろげられるのは、小さな空間をコスチュームとともにふくらませ、押し広げるかのような**藤井彩加**さんのダンスパフォーマンス、そして**山尾麻耶**さんの胡弓の演奏。

藤井彩加さん（左）と山尾麻耶さん

二人のパフォーマーがまとうコスチュームは、今年度のSMFメインプロジェクトとして制作された**福田麻衣**さんによる公募作品。中庭の白い竹の肌や線と呼応するコスチューム、その白い曲木の環、白一色のコスチュームの背景には色彩豊かな花ばなが浮かびあがっていました。

はたして化学反応は起こるのか？　どんな化合物ができるのか？　そんな期待をもってのぞんだ多様な要素を含んだ「創造ラボ」。見慣れた風景、いつものアリットの空間に何かが足され、組み合わされ、動き出す……そんな新鮮な空間を、参加者とともに共有できたように思います。

梅津あづさ（入間市博物館アリット）